

平城宮跡東院地区から出土した縉銭

はじめに 2007年度に実施した平城宮跡東院地区の発掘調査（平城第423次調査）で、平城宮跡内では初例となる縉銭が出土した（『紀要2008』）。縉銭は全国的に見ても類例の少ないものであり、また宮都からの出土ということと相俟って、その学術的意義は決して小さくない。ここでは今後の研究の進展に寄与すべく、研究の基礎となる基本的な情報を紹介しておきたい。

縉銭の出土状況 発掘調査成果について概要報告（『紀要2008』）があるので割愛して、縉銭が埋納されていた土坑SK19121について述べることとする。

埋納土坑SK19121は長軸40cmの不整形の土坑で、残存する深さは約20cmである。ただし、現場中の不注意から土坑を認識することなく一部掘削してしまったため、正確な土坑の形態や深さは不明である。

この土坑のなかに、据え置かれた状態の土師器皿2点と縉銭を確認した。その据え方は、まず土坑の底に10cm

ほどの厚さで土（図43・2～4層）を敷き、その上に縉銭を置く。その後、縉銭の周囲を炭混じりの土（同1層）で埋め戻した上に、土師器皿を2枚並べて置いているようである。土師器皿は2点とも正位である。

SK19121の時期 遺構の時期について見ておくと、遺構の重複関係（図40）からは、埋納土坑SK19121は奈良時代後葉の掘立柱建物SB19115の後に位置づけ得る。また、土坑内から出土した土師器皿は直径約18.0cm・器高約2.5cmをはかり、いずれもAⅡ型式に属する。風化が著しく調整などの観察が困難なため、時期比定は難しく奈良時代中葉との推測にとどまる。以上のように、遺構の重複関係からみた時期比定と土器のそれとの間には若干の差異が認められるものの、埋納土坑という遺構の性格や土器の遺存状況なども考慮して、ひとまず奈良時代後葉に位置づけておくことが妥当であろう。

縉銭の様相 縉銭は銭貨の中央孔に紐を通してまとめられており、直線状に束ねたものを「U」字状に折り曲げて土坑内に置かれていた。土師器皿と縉銭との位置関係の維持を重要視して、出土状態のまま取り上げて保存処

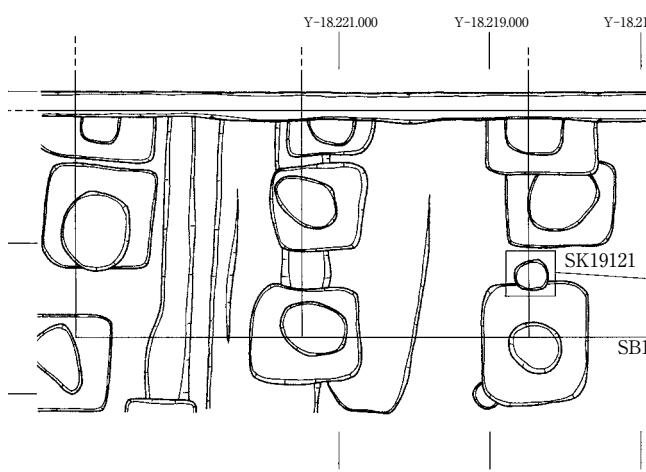


図40 第423次調査遺構平面図



図41 SK19121 (南西から)



図42 SK19121 (西から)

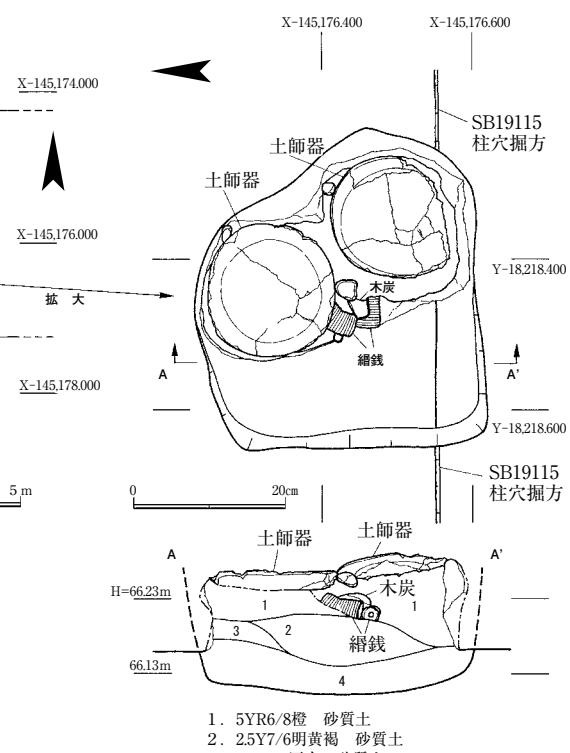


図43 SK19121平面図・断面図 1:10

理をおこなった。そのため、現状ではX線CT法による断層撮影がおこなえず、銭貨の枚数は肉眼で銅貨119枚を確認した。なお、縉銭の紐は切れてはいたものの、出土状況から銭貨の遺失はないと思われる。銭文が判読できる5枚はすべて和同開珎であり、そのうちの2枚は隸開の和同開珎である。銭貨の法量は直径2.51cm・厚さ0.19cmであり、縉銭の長さは約28.6cmとなる。

おわりに 奈良時代後葉という遺構の時期から、当例には萬年通寶（初鑄760年）や神功開寶（初鑄765年）が含まれている可能性もあり、今後はX線CT法などを用いて銭種や枚数の確認、紐の材質の特定といった作業が求められる。また実測図も必要であり、3次元計測器を用い

て作業を進めているところである。

『続日本紀』和銅元年（708）12月癸巳条には「鎮祭平城宮地」の記事があり、平城宮造営時に地鎮祭がおこなわれたことが知られる。今回の発見により、その後も宮内で地鎮がおこなわれていたことが確実となった。今後は、宮都や各地の地鎮遺構との比較や、『延喜式』の記事との比較検討を通じて、地鎮の具体相や性格を明らかにしていく必要がある。

また、SK19121がどの建物に付随する地鎮遺構なのかについては、調査区の北東隅で検出された状況もあって、一切不明である。上述の課題とともに、隣接地における調査の進展に期待したい。

（和田一之輔）

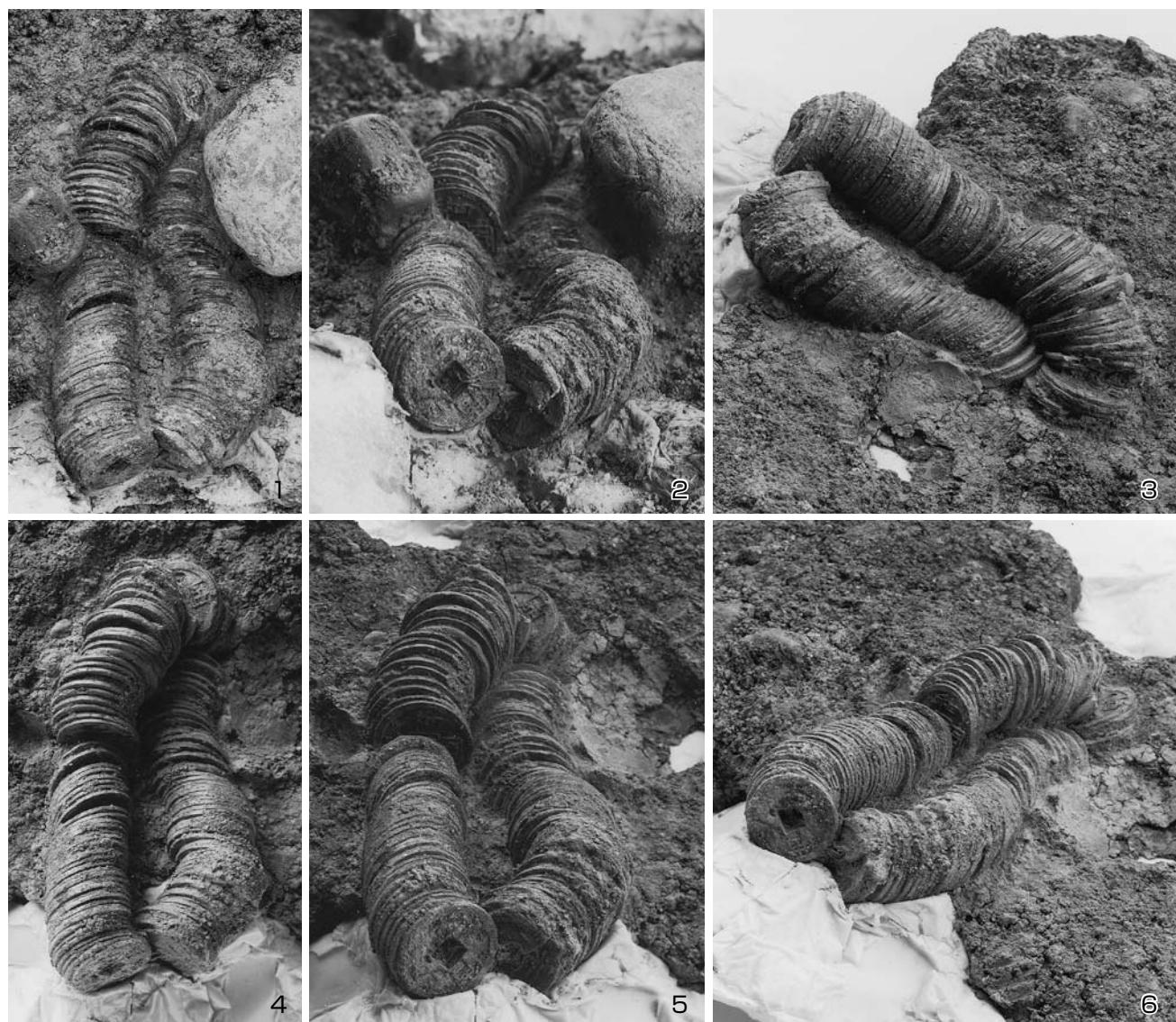


図44 埋納土坑SK19121から出土した縉銭（1・2：処理前、3～6：処理後）